

Series 1_Ostrov nad Ohří オストロフ ナド オリ

街は旧市街と新市街に分けて構成されているが、主には共産主義時代に立てられた集合住宅が林立する。当時、隣町ヤヒモフ Jáchymov で盛んに行われたウラン採掘に従事する労働者が多く住んだため、街はいわゆる新たなモデル都市として建設された。街の中心に位置する文化型集合施設は別名 ”SORELA (=sozialistischer Realismus)” と呼ばれ、戦後の共産主義下にあったモダニズムの面影を今に伝えている。1989年の民主化革命以降、灰色であった当時の集合住宅は新しく様々な色味に塗り替えられている。濃い霧の中にそれら色味をもった集合住宅がひしめき合う光景は、その歴史的背景を彷彿とさせ、はじめて見る者を圧倒するである。



Series 1_Ostrov nad Ohří
11 images
2012

Series 2_Háj ハイ

ドイツから徒歩で国境を越えチェコに入る。国境とはいっても、小さな小川が自然国境線として指定されているだけで、ここで国が変わったのだという実感とはほど遠い。チェコ側の国境の街 ローチュナ・ポト・クリノヴツェム Loučná pod Klínovcem からさらに丘陵を超え20分ほど森の方へ歩くと、人々が暮らした集落の跡地にたどり着く。丘の上でふと後ろを振り返ると、対峙する山手にはドイツの街オーバーヴィーゼンタール Oberwiesenthal が見える。

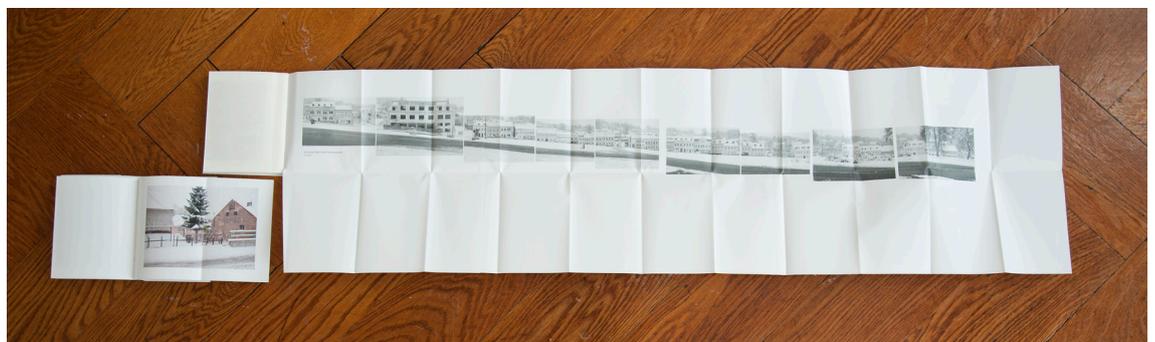
夜になると廃墟の点在する谷は、きまって霧の中に沈む。この深い谷間で静かに牧畜や農業を営み暮らしていたかつての住民は、丘に登った時、対峰を見やり何を考えただろうか。過去の一連の出来事が、この地にその痕跡をとどめさせたと言えるかもしれない。廃墟の残る山間の地域は、現在は自然保護地区として指定されており、ユネスコ世界遺産への登録も検討されている。



Series 2_Háj
8 images
2012

Series 3_Jáchymov ヤヒモフ

ヤヒモフ Jáchymov はエルツ山脈に位置する他の街と同様、およそ15世紀ころから銀やウラン等、様々な鉱物の採掘地として栄えた。国道25号線の急勾配沿いに立ち並ぶ家屋は、第二次世界大戦後、ソ連の管轄によってウラン採掘のための強制労働に従事した捕虜の住居跡であり、今ではほとんどが廃墟となっている。わたしの二回目の訪問は10月の下旬であったが、初雪に見舞われ、朝降り始めた雪は夕方には15cmほど積もっていた。地域の過酷な生活条件を伺わせる体験であった。



Series 3_Jáchymov
Designed by Mako Mizobuchi
Book Size: 120 x 150 mm
Binding: Hand Binding
Pages: 10 images
2012

Series 4_Karlovy Vary カルロヴィ バリイ



Series 4_Karlovy Vary
8 images
2012

*

4つの写真群によって構成された“Unsichtbare Linie - 不可視ということ”は、全てドイツとチェコの国境付近に位置するエルツ山脈内の小さな街で撮影したものである。この地域はおよそ800年頃から第二次世界大戦にかけて、多くのドイツ人がその鉱山や炭坑資源を求めて入植した地域であり、大戦後チェコ・スロバキアの一早い再建を目指したベネシュ大統領の布告108条（1945年）によって、それらドイツ人の強制退去（追放と記す場合もある）が行われた場所である。さらに、共産主義政権下に置かれた約40年の年月と1989年の革命を経て、地方の再建が活発化し始めたのは未だ数年のことである。わたしがこのテーマを取り上げたきっかけは、ドイツに滞在しはじめた頃に改めて実感した“国境”の理解の難しさにあった。日本での生活の中であえて国境や国、またアイデンティティの在り方を強く意識すること無く育ったわたしにとって、この歴史問題はとても印象的であった。タイトルの“不可視ということ”は、それら国境という概念が取り払われたEUにおいてなお続く経済格差や文化的背景の相違は、逆にわたしという第三者の眼に明確に写るといふことからきている。実際に多くの知人が口にする「今や西洋に国境はない」という考え方と紙一重の現実を、わたしは客観的な視点から問い直さずにはいられない。